

ないかと想像する。やらかすたびに、ニヤツとお笑いになって、すぐまたいつもの表情にもどり、粛々と授業を進められたことと思う。自分の不勉強を棚に上げての言葉になるが、あまり表情を変えられない関先生が一瞬ではあるが笑ったことが、今でも忘れられない思い出である。

たぶん、こんな駄文を書いている僕のことを見て、空の上から、そんなことしか書けないのかと、またニヤツとお笑いになっていることと思う。

ふがいない卒業生ではあるが、お許しくださいませと思う。

先生のご冥福をお祈りする。

(にかいどう・ひとし)

関先生の思い出

田中(石井)敦子

関一雄先生がお亡くなりになったのを知ったのは、今年度の学会報告が送られて来た時でした。検索してみると、いくつかの新聞サイトに「老衰」とあり、ああ、先生はこちらからあちらへ、そんなりと渡っていかれたのだなあと思いました。きっと最後の時まで次の研究のことをお考えになっていたことでしょう。それからしばらく大学時代のことが次々に思い出されたところ、ちょうど開設された研究室のLINEからお声をかけていただき、この文を書くことになりました。

研究室に入ったのは昭和五十八年でした。この年は国文学研究室が大人気で、国語学は希望者が少なかったたので、私は無試験で研究室に入ることができました。当時の教官は関先生と添田建治郎先生でしたが、学生間では、競争を勝ち抜いた国文学に比べ、国語学メンバーの不勉強を嘆かれているとの噂もありました。事の真偽はさっておき、私は謙遜なしに不真面目な学生でした。

高校時代に古典文法などが好きだったので国語学を選んだものの、ゼミの前にちょこちょこ調べてみる程度で、ほとんどろくな発表はできませんでした。最初のゼミ発表では基本的な語の定義すらいい加減で、先生があきれたような口ぶりで指摘されたことを覚えていきます。あれは研究室に入りたてだったので叱られなかったのでしょうか。

お二人の先生方には、「調べること」のキホンを厳しく教えていただきました。私たち学生が一番恐れていたのは、発表をやっとこさ終えた後の「それは問題点ではありません」というお言葉でした。(これはこれで「やっぱりな」という感じで、いつぞ清々しかったものです)。またいつ頃だったか、関先生のゼミで、発表者が「用例は『日本国語大辞典』に載っていました」と言った時に非常にお怒りになり、原本に当たることの大切さを懇々と説かれたことがありました。資料の中から自分で問題点を探すこと、調べるときに又引きをせずに元資料に当たること。現実には何とかして発表を乗り切ることしか考えていませんでしたが、当時いつも一緒にいた友人Eと、「私たちは勉強はできなかったけれど、勉強の仕方を教えてもらった」と話したものでした。友人Eといえは、この文を書くに当たって、何か思い出はある?と聞いたところ、「少女Aし

か思いつかない」と言います。私はすっかり忘れていましたが、先生は中森明葉のファンで、授業の用例がいつも「少女A」だったとか。生真面目さのなかにお茶目なところがありません。

卒論の口頭試問の最後に、先生から「まあ、あなたは採用試験に受かってますからねえ。」（我ながら惨憺たる出来だったので、受かっていなかったら…）そして「あなたは高校の先生になるのだから、生徒に嘘を言ってははいけません。生徒は嘘を信じますから。」とのお言葉をいただきました。岡山県の高教員となって何十年、忘れたことはありません。胸を張って「守っています」とはいえないのですが…。

卒業後何回か学会に顔を出してご挨拶をしましたが、最後にお会いしたのはいつか思い出せません。年賀状だけは出していましたが、一昨年のものが最後になってしまいました。数年前、学校現場の激変をお伝えしたところ、「国語の教育をよろしく願います」と書かれたお返事をいただき、身が引き締まりました。こうして書いていても、先生とはわずかな接点しかないのですが、還暦の今まで何とか高校教員を続けて来られたのは、間違いなく大学時代のご指導のおかげです。文法もけっこう面白いと生徒に思わせたくて、あれこれ説明する時の気持ちは学生時代の興味そのまます。今の学校では、国語の予習より「探究学習」の担当の方に時間を取られています。が、ほんやりした興味関心しかない生徒たちに、「問題点を探すが大事」「資料をできるだけたくさん見る」「出典は必ず明記」と話す時、研究室で学んだ時の心持ちが続いているのを感じています。いつまで教員を続けられるかはわかりませんが、学ぶことをずっと忘れずにいたいと思っています。

関先生、本当にありがとうございました。そして国語国文研究室に感謝を込めて、追悼文とさせていただきます。

（たなか・あつこ）

関一雄先生をお偲びして

小野美典

関一雄先生がお亡くなりになった。わたくしはそれを東京の地に住んでいながら知らなかった。七月に本誌の「追悼文」案内を見て知った次第である。

関先生に初めてお目にかかったのは今からちょうど四十年前、学部の二年生になって国語国文学研究室に入室した時だった。わたくしは国文学専攻だったので関先生に直接卒論指導をしていただけではない。しかし、関先生の授業の幾つかは履修させていただいた。そして何よりも、自主ゼミとして毎週開講されていた「中古ゼミ」の末席に座ることを許していただいた。国文学専攻生での参加は珍しかったと思う。

関先生は研究に対してとても真摯で誠実な先生であられた、と門外漢のわたくしは拝察する。研究となると、誰に対しても率直で忌憚のない発言をされた。わたくしが初めて学会発表をしたのは、学部四年生の時の人文学部国語国文学会だった。今から考えると「学